隅田川

ＪＪ1ＳＸＡ/池

私は、隅田川と聞けば、♪♪春のうららの　隅田川　上り下りの　船人が…♪♪という童謡と隅田川花火大会がすぐに脳裏に浮かびます。

隅田川は、東京都北区の岩淵水門で荒川から分岐し、東京湾に注ぐ全長23.5kmの一級河川で、古くは墨田川、角田川とも書いたようだ、江戸時代には、吾妻橋周辺より下流は大川とも呼ばれた、時代小説には「大川端」という言葉が頻繁に出て来る。

河川名は、河川法などで定められているが、「隅田川」が法的に正式名称になったのは、今から半世紀一寸前（昭和40年のことだ）で、意外と歴史は浅い。

1896年の旧河川法制定時、上流の「荒川」に合わせ、現在の隅田川も「荒川」とされていたが、たびたび氾濫する荒川から下町を守ろうと、1930年、北区の「岩淵水門」で枝分かれして東京湾に注ぐ新たな人口河川「荒川放水路」が完成、1965年の河川法改正で、荒川放水路が荒川の本流とされ、元々の流れは、長年の通称名だった「隅田川」に変えられたのだ。

荒川放水路の工事は、明治の終わりから大正を挟んで昭和の初めまでの、世界と日本の歴史を背景に、掘削機が出現したり、不景気に見舞われたり、関東大震災に直撃されたりしながら進められていくのだった。

現荒川の荒川放水路が掘削される以前、現在の荒川を流れる水は現在の隅田川（旧荒川）に流されていました、川幅も狭く多大な流量をさばききれなかった隅田川沿岸では度重なる洪水に悩まされていたようです。

江戸期から出水はほぼ毎年といっていいほど発生し、沿岸の農家（当時この辺りでは農業が主産業でした）はどこも屋根裏に船を用意して冠水に備えるのが当たり前だったそうです。

利根川の東遷を含む度重なる治水事業が行われたものの決定打とはならず、明治期に入っても大規模な洪水は後を絶ちませんでした。

放水路を企画する直接のきっかけとなったのは1907年と1910年の大洪水だったようですが、1910年の夏の豪雨の際に荒川の堤防が13カ所にわたり決壊、王子や岩渕をはじめとして浅草や本郷付近までも浸水します（いわゆる「関東大水害」）、浸水家屋は27万戸、死者223人を数える大惨事であり、災害対応には軍隊も動員されたそうです、現在で言えば自衛隊の災害派遣に当たります。

1907年の水害の後、東京市議会に対し流量を調整するために放水路を掘削すべきとの意見書が出され、また1908年にも川口弥三郎議員から「荒川分水開削に関する建議」が出され、同時期に当時国内インフラの整備を一手に管轄していた内務省内部でも検討が始まります。

当初放水路のルートについてはいくつかの案が検討されましたが、最終的に海から24kmの地点にある北区岩淵（現在の岩渕水門）から掘削するという当初検討されたものよりも大規模かつ抜本的な案が採用される事になりました、土木行政・執行を一手に担っていた内務省は1911年半ばに用地買収を開始、その後2年間で移転対象者の9割6分と買収契約を結ぶに至ります、一方、移転が行われる中で様々な問題が発生、農業従事者の新しい職探し、水面下に没することになる小学校に通う児童の転校先選び、先祖代々の墓を掘り起こしての移転…移転戸数1300戸という数字の裏には、補償金の授受だけでは語れない多くの苦労があったようです。

補償金そのものについても内務省の強大な権限もありその額は必ずしも十分なものとはいえず、おまけに受け取った補償金を銀行に預けたところ、その銀行が折からの恐慌で倒産して全額失うという話も数多くあったようです、通水前年の関東大震災時には河底になる予定の空き地が避難所として大きな役割を果たしたそうです、隅田川の歴史は色々あったのです。